

おほはらへのりと あまつふとのりとおんず
 大祓祝詞、天津太祝詞音図が何時ごろ制定されたのか、正式な記録はありません。民間に伝わる竹内文献・阿部文献によると、神武天皇に始まる神倭王朝の前、鵜草葺不合王朝第三十八代天津太祝詞子天皇がこの祝詞を制定したと伝えられています。その時は何時か。神武天皇即位より遡ること約千年、今より三千七百年前頃と推定されます。

その後、この祝詞は年々朝廷に於いて使用され、イスラエルの王モーゼが来朝・留学した際、この祝詞の内容の骨子がモーゼに伝与された事が確められています。その証拠は大祓祝詞の中の「国津神」の内容が、旧約聖書の出埃及記・利未記にその詳細な説明が載っている事であり、(お疑いまたは興味を持たれた方は是非祝詞の国津罪と旧約の出埃及記、特に利未記をお読み下さい。立所に了解されるであります。)

その後、鵜草葺不合皇朝より神倭王朝に替わってからもこの祝詞は使用され、最後に六九一年頃柿本人麻呂による修辞によって今日見られるような美文となったと伝えられています。

では大祓祝詞にはどんな事が述べられているのか、を予め箇条書にまとめておく事にしましょう。

- 一、古事記・日本書紀に記されている^{ににぎのみこと}邇々芸命と呼ばれる人とその集団が、この日本列島に^{てんそんこうりん}天孫降臨して、日本の国家建設を始めた時の歴史状況。
- 二、国を肇めるに当たって、その建設には如何なる基本方針に基づき、どんな国家体制を目指したか。
- 三、方針に基づき理想的精神文明の国家が建設された後、歴史の進展と共に日本国並びに世界の各地に醸成されて来る種々の矛盾、罪穢の種類とその内容の説明。
- 四、歴史が更に進み、人類が人類文明創造の基本方針を忘れ、社会の汚濁が頂点に達した時、その罪穢を祓い、禍因を根絶して、肇国時代そのままの永遠の調和・平安を取り戻す為の、人類が頼るべき唯一無二の処置法の開示。
- 五、その操作、処理の成功によってもたらされる平安・調和の時代は如何なる政治が行われるか、の説明。

以上の内容が簡潔・明瞭に述べられています。これについての話が進んで行く内に、読者はその教示と予言の見事さに目を見張る思いがする事でありましょう。

さて前置きはこの位にして大祓の話に入りたいと思いますが、現代に生きる読者は冒頭に掲げました大祓祝詞をお読みになってどうお感じになられたでしょうか。その内容がお分かりになりましたでしょうか。「難しくて何を言っているのか、さっぱり分からない」と言う方が大方ではないか、と思います。そのお分かりになれない理由は何か。現代人には昔の言葉が分からない為か。否、そうではありません。ほとんどすべての現代人にとって全く耳新しい言霊布斗麻邇^{ふとまに}の原理に則り、これを土台として大祓祝詞が書かれている為であります。言霊の原理に通じませんと、大祓の内容は全く雲を掴む如くその理解は困難であります。言霊布斗麻邇の学問が世の中の常識であった昔に、大祓祝詞は書かれたものなのです。

幸いな事に私の言霊学の師、小笠原孝次氏が書きました「大祓祝詞解義」という本があります。氏はその一生を言霊布斗麻邇の復活の仕事に捧げ、昭和四十四年、言霊学解説の最初の書「古事記解義言霊百神」を世に出しました。次いで復活された言霊学を基礎に昭和四十五年、「大祓祝詞解義」(改訂再版)を刊行しました。大祓祝詞の全内容を解明し尽くした名文章であります。私が今からお話する「大祓祝詞の話」も先師のこの「大祓祝詞解義」を下敷きとして進めて行く事となります。

「そんな名文の解説書があるなら、それを再版して広めたらよいではないか」と思われるかも知れません。それで済むことなら私もこれ程楽な事はないのですが、そうもいかないのです。何故なら、先師の「大祓祝詞解義」は著者自筆のオフセット版で三十七頁の冊子です。その三十七頁に言霊原理の精髓を大祓祝詞の中に投入して、鮮やかに祝詞の謎解きをしましたので、言霊原理の理論に精通している方なら兎も角、言霊学に詳しくない方にとっては、大祓祝詞の難解さと言霊学の難しさとが相乗されて、唯ただ「難解だ」という読後感だけが残ってしまう恐れがあります。



そこで先月の会報で「古事記と言霊」のお話の三回目を終了した事でもありますから、これより改めて言霊学の復習をしながら、大祓祝詞の解説に入って行きたいと思う次第であります。今回は大祓祝詞の話の第一回でありますので、言霊の原理が大祓祝詞の全文にわたりどの様な関係にあるのか、その要点を予めお話申し上げたいと思います。

大祓祝詞は全文が天津日嗣天皇（スメラミコト）の人類文明創造とそのため政治について述べています。政治と申しますと、大方の人は権力・武力・財力を基礎とした政治を思い浮かべることでしょう。過去二・三千年間の世界は常に専制・民主の如何に関係なく、この権力・財力・戦力の強権を持った政府による政治でありました。けれど各民族の神話が伝える所謂神代の時代、言霊学的に見れば、人類の第一精神文明時代に於てはそうではありませんでした。それはどんな政治なのか、と申しますと、人間の精神とは何か、を深く洞察した言霊原理による道徳の政治でありました。

かく申しますと、「道徳で国家・世界の政治が出来る筈がないではないか」と反駁する方もいるでしょう。そこで言霊の原理というものが権力・武力等の力の政治とは違って世の中を治める立派な手段となる事を、ここで確めて置こうと思います。それが人類にとってこの上ない理想の世の中であり、それによる政治が社会の安定と平和をもたらす最も確実な方法である事をお分かり頂ける筈であります。

先ず人間の魂の進化の問題を取り上げてみましょう。蝶は成虫となって大空に飛び立つまでに幼虫・蛹・成虫の三段の進化をします。人間は生まれてから死ぬまで外形は蝶ほどの変形はしませんが、心は五段階の進化をします。その進化とは人間に与えられた五つの性能を段階的に一段々々自覚して行く進化であります。その進化を人の心の住家である母音宇宙で示しますと、下から順にウオアエイの界層の自覚の進化で表わすことが出来ましょう。

人はこの世に生まれると先ず乳を吸います。生長するに従って玩具が欲しい、美しい着物が着たい、から段々よい生活がしたい、名誉がほしい、大勢の人を支配したい等、欲望が大きくなります。このような五官感覚に基づく欲望の段階を言霊ウと呼びます。この欲望を人生の

最大の関心事として一生を送る人が如何に多い事でしょうか。この行為から社会の産業・社会が成立して来ます。

人の心の進化の第二段階は言霊才であります。ここから現出する人間の行為は人が経験する幾多の行為の現象との間の関係を調べ、それを法則化する事、広く言いますと学問の事であります。現象間の関係法則を求め、個別の現象から一般の法則を求めることを事とします。精神と物質の科学はこの所産です。

第三の進化段階を言霊アと言います。これより現出するものは感情現象であり、これによって生まれ出る人間の社会的行為は芸術・宗教活動です。この進化段階の宇宙を思索することによって宗教的悟り、魂の救われ・自由を実現することが出来ます。禅ではこの次元自覚の世界を「空」と呼びます。人間精神現象がそこより生じ、またそこに帰って行く元の宇宙のことです。仏教の言葉を借りると、進化の第一段階の人を衆生、第二を声聞、第三を縁覚と申します。縁覚とは人間の経験知識の何たるかを知ることによって、その知識が現出する元の宇宙の相を自覚し、魂の一応の自由を得た境地であります。

進化の第四段階を言霊エと言います。この次元宇宙から発現する人間行為は実践智・道徳智です。人が何事かの処理を必要とする時、今までの三段階、欲望と経験知識と感情の三つをどの様にコントロールすれば最良の処置法が得られるか、の実践智の段階です。仏教修行の言葉で言えば、第三の言霊アの悟りで一応の魂の自由を得て、自らは救われた、しかし世の中には心の束縛のために苦しんでいる人が多勢いる。何とかしてそれ等の人々を導き、自由な境地に救ってあげたい、と利他の行に発心する人、これを菩薩と呼びます。自分のためにどうしたらよいか、ではなく、人のために如何にしたらよいか、を学ぶ修行です。利他の修行を通じて、やがてはその積んだ徳のおかげで将来、仏と成る事が約束される菩薩、これを仏教で因位の菩薩と言います。

進化の第四段階を言霊エと言います。この次元宇宙から発現する人間行為は実践智・道徳智です。人が何事かの処理を必要とする時、今までの三段階、欲望と経験知識と感情の三つをどの様にコントロール

すれば最良の処置法が得られるか、の实践智の段階です。仏教修行の言葉で言えば、第三の言霊アの悟りで一応の魂の自由を得て、自らは救われた、しかし世の中には心の束縛のために苦しんでいる人が多勢いる。何とかしてそれ等の人々を導き、自由な境地に救ってあげたい、と利他の行に発心する人、これを菩薩と呼びます。自分のためにどうしたらよいか、ではなく、人のために如何にしたらよいか、を学ぶ修行です。利他の修行を通じて、やがてはその積んだ徳のおかげで将来、仏と成る事が約束される菩薩、これを仏教で因位の菩薩と言います。ただ一人の自分を救うこと、これは比較的易しい事と言えます。けれど無限とも思える多勢の苦悩を救う事の完成は気が遠くなる程至難の業でありましょう。はっきり言って生身の身体を持つ因位の菩薩がその修行の延長上で成仏することは不可能な事なのです。

精神進化の第四段には先の因位の菩薩の自覚とは全く異なる別の精進の道があります。仏道はこれを果位の菩薩の道と呼んでいます。因位の菩薩が多勢の人々を救う事によって、長い精進の後に仏に成る事を目指す修行の道であるのに対し、果位の菩薩とは、仏である身が衆生済度の目的のために身を菩薩と変じ下生した菩薩の事です。普賢・勢至・観世音等の菩薩がこれに当ります。仏教でははっきり述べませんが、因位の菩薩が人々を多勢救う功德を積む菩薩であるなら、果位の菩薩とは自ら具備する仏の徳によって国家・人類全体を救済する大乘中の大乘たる菩薩の事であります。

人間精神の進化の最上の第五段は言霊イの自覚段階です。この次元宇宙より発現する人間の性能は意志または生命意志と呼ばれるものです。この意志というものは、自らは現象として現われることはありませんが、その見えない働きである八つの父韻が、今まで述べて来ました言霊ウオアエの四次元宇宙に働きかけ、それぞれの宇宙より合計三十二(4×8)の現象子音を現出させます。と同時に、現出した現象を言霊の結合という方法で表現する(日本語)という分文明創造の根本土台となる性能の次元でもあります。

人間は如何なる境地を開拓し、心を進化させようとも、それだけで進化を自覚した事にはなり得ません。その進化した境地の内容を言葉

によって表現し得て初めて自覚の証明が得られます。仏教の得度・済度の度という字は渡すこと、即ち登りつめた境地を言葉に渡す（度）事によって表現するの意であります。そして人間精神の最高の進化段階は生命意志を構成する五十個の言霊によって組み立てられ、それ以外のものは存在しません。それ故にこの言霊イの次元の自覚の境地は言霊五十音の結合によって事物の実相を表現する言葉、即ち日本語によってのみ表現・自覚の完成が可能なのであります。太古の日本がアオウエイ五十音言霊の原理によって作られた大和言葉を日常使用する国家として、その国名を日（霊）の本と呼ばれた所以であります。

以上、人間精神の五段階の進化を言霊原理によって説明いたしました。心の進化の最終段階である言霊イの自覚の方法は、古事記の「禊祓」に示されています。即ち言霊原理によってのみ精神の最高自覚は完成されます。これ以外の自覚の道はありません。この禊祓の言霊原理に基づいた大祓の祝詞でありますから、聖書ヨハネ伝に「初めに言葉あり、言葉は神と共にあり、言葉は神なり」と示される生命の言葉として人類文明創造の原動力となることをお分かり頂けると思います。